

5-5 内湖

琵琶湖周辺湿地である内湖は、干拓で大部分が消失し、総面積は35.2km²から5.3km²に減少しました。しかし現在でも、ヨシ帯面積の61%が内湖に分布し、氾濫原性の植物をはじめ、ヨシ帯を利用する多くの在来魚の生息場所や水鳥の渡りの中継湿地として重要な役割を果たしています。

1. 内湖とは

内湖は、もとは琵琶湖の一部でしたが、沿岸流の作用、あるいは湖への流入河川から運ばれた土砂の堆積等によって生じた潟湖（ラグーン）です。明治時代には、琵琶湖の周囲に大小100余りの内湖が広がり、総面積は35.2km²におよびました（P.118「5-4」参照）。しかし、琵琶湖の洪水防御のため、1905（明治38）年に南郷洗堰が建設され、水位が人為的に操作されるようになりました。その後、1943（昭和18）年からは治水と利水を統合した淀川第1期河水統制事業が始まり、湖の平均水位はこの間に数10cm下がりました。そのため、内湖の水深が浅くなり、内湖漁業が衰退し、第2次大戦後、干拓により多くの内湖が消失しました。現在残存するのは23内湖、人造内湖を加えても総面積5.3km²にすぎません。また、ほとんどの内湖が人工護岸化されるなどの人為的改変を受けています。

2. 琵琶湖と内湖の違い

内湖の水深は極めて浅いのが特徴です（西野・浜端、2005）。琵琶湖北湖の平均水深は44mですが、干拓前の内湖の平均水深は1.78m、琵琶湖最大の内湖であった大中の湖（干拓で消失）でも、最大水深は2.7mです。内湖の水深は、昔も今も3m以浅と極めて浅いのが特徴です。

また、琵琶湖では山地・砂浜・植生（＝ヨシ帯）湖岸や人工湖岸のように、多様な湖岸景観が見られますが、内湖の主な景観は植生湖岸と人工湖岸に限られます。古地図や昭和20年代の航空写真には、内湖周辺に植生が広がっており、人為的改変を受ける前の内湖は、水辺（ヤナギ）林—抽水植物帯—（浮葉植物）—沈水植物—開水面という景観構造がみられたと考えられます。

ヨシ帯は琵琶湖岸と内湖の両方にみられますが、1948年に5.14km²あったヨシ帯面積（奥行き10m以上）は、2000年には2.47km²にまで減少しました。しかし現在でも、琵琶湖周辺のヨシ帯の61%が、琵琶湖面積の僅か0.8%にすぎない内湖に分布しています（東、2017）。

内湖は、琵琶湖と比べて浅く面積も小さいため、水温の日較差、年較差が大きいという特徴があります。また、内湖は集水域から流入した水を一旦貯留した後、

琵琶湖に流出させる沈殿池の役割を果たしています。そのため、集水域からの負荷が大きいと富栄養化が進行しやすい水域です。一方で、波浪の強い琵琶湖と比べて風波の影響が小さいため、浅い水域に生息する生物にとっては、内湖がレフュージア（避難場所）として機能している可能性もあります。

3. 内湖の生物

内湖にはヨシ帯と関連した生物が多く、特にノウルシなど原野（氾濫原）の植物や、オニナルコスゲなど寒冷地の湿地性植物も多く生育しています。また琵琶湖の在来魚約60種の半数ほどがヨシ帯を利用しており、実際、2000年の調査では、在来魚31種が内湖で確認されています。残念ながら、すべての内湖に外来魚のブルーギル、2/3の内湖にオオクチバスが侵入しており、内湖本来の豊かな在来魚類相はみられなくなっています。一方で、琵琶湖岸のヨシ帯とともに、内湖はコハクチョウやガン・カモ類を中心とする水鳥類の渡り（フライウェイ）の中継湿地としても重要な役割を果たしています。



写真5-5-1 最大の残存内湖である西の湖（近江八幡市）を東側から眺める。上方に見える水面は琵琶湖